

< 掲載記事 >

巻頭言

- ・ 場長挨拶

平成20年度新規課題

- ・ 夏秋どりいちごの高設栽培による安定生産技術開発

トピックス

- ・ 人の動き
- ・ ながいも優良種苗検討会
- ・ 農作業体験
- ・ 春作業始まる
- ・ 遅霜の被害、その他の春の風景

食生活は地産地消が理想、今こそ農業の技術開発に力を

場長 長谷川 一

定期人事異動で農林総合研究センター砂丘研究部から畑作園芸試験場へ配置換えとなり4月から着任しました。県南地方での勤務は始めてですが、本県の農業生産額の四分の一を占める野菜生産の中心地において、多くの生産者の笑顔に出会えるように農業の生産現場に役立つ研究に取り組んでいきたいと考えている。

現在、世界中で栽培されている数多くの作物は、長い年月をかけて多くの先輩達の努力の積み重ねによって開発されてきました。それらの中には、野生種とは形態が大きく異なり、奇形種と言っても過言ではないほどのものもあります。地球上の人口は毎年1億人近く増加する一方で、農作物の作付け可能面積は年々減少しています。中国の言葉に「身土不二」という言葉がありますが、その意味は人と土は二つに分かれるのではなく、ひとつであるという。現在のように物の流通が発達する以前は「地産地消」が当たり前で、人々が住む四里四方に自生している様々な植物をその旬に食するのが最も健康的と考えられておりました。現在は、食のグローバル化が進み、世界中のあちらこちらからたくさんの食料が輸入され、私達の食生活を豊かにしています。

しかし、真剣に自分達の健康を考えるならば、日本の環境と大きく異なる国々で生産された食べ物を日常的に食することを再考する必要があるのではないかと思います。国内を見渡すと、全国各地にファーストフード店が進出し、生活習慣病患者やその予備軍（子供達を含め）が増え、成人においてはメタボリック症候群の人が年々増えています。海外の先進諸国において日本食が健康食と高く評価されているというのに、肝心の日本人が日本食を食する機会が減り、健康を害する人が増えているというのは何と嘆かわしい事態であろうか。そのような中であって、最近我が国の消費者は安全で安心な食べ物を得るために海外からの安価な輸入農産物の購入を控えるようになり、自分の身は自分で守るという意識が強くなってきているようで、農産物を生産する農業を支援する立場の我々にとって非常に有難い話である。

県財政が厳しさを増す中で行財政改革が進められ、試験研究機関においても予算縮小と人員削減が毎年求められている。しかしながら、我が国の食料生産に大きく貢献している本県において、今こそ本県農業を支援するための技術開発に「人、物、金」を投じるべきであると考えるのは私一人であろうか。何はともあれ、試験研究機関の独法化を平成21年4月に控え、これからは工業、水産、加工の各分野との連携を一層強めながら、本県農業の生産現場に役立つ技術開発と品種開発に職員一丸となって取り組んでいきたいと考えている。

平成20年度新規課題

夏秋どりいちごの高設栽培による安定生産技術開発（平成20～21年度）

いちごは国産の生食用いちごの端境期である夏秋期でも一定の需要があり、製菓業界からは輸入品より国産品が強く要望され、生食用も含め需要が拡大している。

夏季冷涼な本県の太平洋沿岸地域や高冷地等は夏秋どりいちごの生産に適しており、土耕栽培を中心に作付が増加している。一方、連作障害を回避し、作業の軽労化にもつながる高設栽培が平野部を中心に増加しており、稲作地帯の農業者や建設業者を中心に生産振興を図る上で安定生産技術の開発が求められている。また、県では、夏秋いちごを戦略作物として位置づけ産地育成に取り組んでいる。

そこで、低温処理や短日処理を行わなくても、春夏期に連続的に花芽を形成する四季成り性品種を用いた夏秋どり技術を確立するために、高設栽培において主要な四季成り性品種の夏秋どり栽培特性を解明し、養液管理方法を確立し、高温対策として細霧冷房の効果を確認する。

主な研究課題

1. 品種特性の解明

「なつあかり」、「サマールビー」、「ペチカ」、「ほほえみ家族」、「エッチェス-138」等の四季成り性品種を供試し、高設栽培システムにおける時期別の収量、品質（外観、内部）、開花・出蕾の状況等の栽培特性を明らかにする。

2. 細霧冷房の効果

盛夏期を中心に、細霧冷房の有無と収量・品質との関係を把握する。

3. 養液管理方法

安定した花芽分化、生育、収量、品質を確保するための養液管理方法を明らかにする。

担 当：栽培部

トピックス

人の動き

1. 転出者（平成20年4月1日付）

職 名	氏 名	転 出 先
場 長	肥口 一雄	定年退職
研究調整監	豊川 幸穂	定年退職
病虫害防除 室長	藤田 厚	東青地域県民局地域農林水産部 副参事（農業振興課 長事務取扱）
主 査	竹ヶ原 幾子	上北地域県民局地域農林水産部 主査
主 事	田口 功	三八地域県民局地域健康福祉部 主事

2. 転入者・昇任者（平成19年4月1日付）

職 名	氏 名	旧 所 属 ・ 職
場 長	長谷川 一	農林総合研究センター総括研究管理員
病虫害防除 室長	石谷 正博	農林総合研究センター畑作園芸試験場 総括研究管 理員
総括研究管 理員	岩瀬 利己	農林総合研究センター畑作園芸試験場 栽培部長
栽培部長	庭田 英子	農林総合研究センター畑作園芸試験場 研究管理員

主査	木村 るり子	ふるさと食品研究センター農産物加工指導センター 主査
主査	木村 博行	ふるさと食品研究センター農産物加工指導センター 主査
主任研究員	西舘 勝富	農林総合研究センターりんご試験場県南果樹研究センター 主任研究員
技師	豊川 幸穂	農林総合研究センター畑作園芸試験場 研究調整監 (再任用)

ながいも優良種苗検討会開催

平成20年4月24日、県農産園芸課主催で、生産現場へ供給している優良種苗「園試系6」のむかごの供給母本である成いもの形状を、生産者、関係機関と確認し合うため、ながいも優良種苗検討会が当試験場で開催されました。

検討会では、生産者、JA、全農あおもり、普及指導室、県農産園芸課、畑作園芸試験場の担当者40名が出席し、母本の形状とともに、その増殖方法、形状選別試験結果等について、確認し合いました。また、新しく完成したむかごの生産網室についても紹介しました。

最後に、ながいもの優良種苗増殖について関係者が一丸となってすすめていくことを確認し、閉会となりました。



「園試系6」の形状



形状選別試験結果について検討



新たに建てられた硬質フィルム網室の紹介



場内での検討、意見交換

農作業体験（ばれいしょの植え付け）



いちい幼稚園・春日台保育園（5月2日）



大曲小学校（4月23日）

春作業始まる



ながいも種子準備（切りいも）



選別された切りいも種子



土壌消毒被覆用マルチの回収



回収された使用済みマルチ



夏秋いちごの高設栽培



四季成り性いちご品種の栽培特性調査

遅霜の被害（5月11～12日）

3月～4月が暖かく推移し、冬作物の生育や桜の開花が大幅に早まった年度明けとなりましたが、5月10日から12日にかけての低温と遅霜により、作物や野草などに被害が発生しました。

当場の気象観測では、5月9日の午後3時から12日の午前8時まで連続して気温が10以下となり、最低気温が、11日未明には - 0.6 、12日未明には - 0.7 を記録しました。

研究上の支障となる被害はほとんどありませんでしたが、場内の作物や野草類等に被害が発生しました。



マルチ栽培のばれいしょ



いちご



うど



みず

その他の春の風景



5月中旬に開花盛期となったなたね畑



乾燥状態が続き雨を待つにんにく畑